

香川生物 (Kagawa Seibutsu) (19): 111-112, 1992.

## 香川県琴南町で報告されたカスミサンショウウオは オオダイガハラサンショウウオ

川 田 英 則

〒764 香川県仲多度郡多度津町 多度津町立多度津中学校

A collection of *Pachypalaminus boulegeri* from Kotonami Town, Kagawa,  
which was previously identified as *Hynobius nebulosus*

Hidegori KAWATA, *Tadotsu Junior High-school Tadotsu-cho, Nakatado-gun,*  
*Kagawa 764, Japan*

川田 (1969, 1974) が記載した讃岐山脈北側 (香川県仲多度郡琴南町浅木原) に生息しカスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* と同定した標本を再検討し, また1991年8月4日に同所で採集した幼生2個体を同定したところ, オオダイガハラサンショウウオ *Pachypalaminus boulegeri* であることが確認されたので報告する。オオダイガハラサンショウウオの未発表の採集記録を心よくご教示いただいた京都大学の松井正文博士と懇切丁寧なご校閲を賜った香川大学の金子之史博士に対し, 心より感謝の意を表する。

香川県の両生綱有尾目については, 岡田 (1935) が, はじめてカスミサンショウウオを香川産として記録した。つぎに浦上 (1939) は香東川, 土器川および財田川の上流でカスミサンショウウオが生息すると述べた。

一方, 川田 (1967) はカスミサンショウウオについて, 坂出市金山山麓を中心とした産卵, 生態や幼生について報告した。このカスミサンショウウオの個体には体色に2つのタイプがあり, 一つは体色が暗褐色で尾に黄条のあるものとなないもの, 他方は暗黒紫色で尾に黄条のないものがみられていた。さらに, 体色の暗黒色の個体群は共通して小さい地衣状の灰白色斑点がみられると述べた。

ひきつづいて川田 (1969) は, 1968年9月24日に仲多度郡琴南町 (旧美合村) 浅木原 (標高700m) の溪流で, カスミサンショウウオの成体と幼生を採集した。全長は150mmあり, 体色は黒紫色に背面から尾にかけて, 小さい地衣状の灰白色の斑点が分布していると記述している。さらに川田 (1974) は, この琴南町浅木原で採集した幼生を室内で飼育し, 変態後の幼体の体色及び地衣状で灰白色の斑紋の特徴が金山産の暗黒紫色タイプの個体と酷似していたため, カスミサンショウウオと同定している。

ところが1988年4月15日京都大学教養部松井正文博士ほか2名は, 仲多度郡琴南町浅木原でオオダイガハラサンショウウオの成体8個体 (全長148.7~180.0mm) と幼生9個体を確認した (未発表)。

そこで, 筆者は1991年8月4日再び同所を訪れ, 礫のすき間に入る幼生2個体を採集することができた。採集時は気温23°Cで水温17°Cであった。なお, 溪流周辺の枯れ枝や落葉の堆積した腐植土を掘り起こし成体の採捕を試みたが発見できなかった。

採集された標本について佐藤 (1943) のオオダイガハラサンショウウオに関する体色の記載をみると, 「生時は頭部背面より尾部側面に至るまで, 全体一様な石板色でなんら斑紋もない。

四肢背面も体背と同色で、指趾端のみわずかに色が淡く帯黄色を呈する。腹面も背面と同色であるが、わずかに淡色をなし、頭部腹側より尾部腹面は少しく赤紫色を帯びている。液漬にしても少々退色する程度でほとんど変化を見ないと記されている。

さらに「1, 2年を経た幼形では、濃い紺地の体表面に金属光沢を放つ白色の顆粒状斑点を散布する。この斑点は胴部背面、体側、尾部及び四肢の背面において殊に多く、腹面には少ない。又幼若なるもの程密に分布した斑点を有する」と述べられている。

そこで川田(1969)が成体として記載した個体は、まだ完全な成体でなく幼形と判断すると、上述した佐藤(1943)の幼形の記述と一致する。また、川田(1974)が室内で飼育した変態後の幼形の体色及び灰白色の特徴も一致することになる。

千石(1979)によればオオダイガハラサンショウウオの幼生はハコネサンショウウオの幼生と似ているが、前者では尾びれは背面で胴の中央かそれより前方から始まるのに対して後者では後肢の上部から始まる。また前者では尾びれの幅が広く、指先にある黒色の爪は角質化が弱く、時にはほとんど消失していること、四肢の背面に皮膚のひびがないこと、などの諸点で区別できると書かれている。今回採集の幼生はこの千石(1979)の記述とも一致した(図1と2)。

以上のことから、川田(1969, 1974)で報告

したカスミサンショウウオは、オオダイガハラサンショウウオの同定の誤りであることと、現在も同地でオオダイガハラサンショウウオは採集が可能であると結論づけられる。なお、琴南町浅木原の同地の景観を少し詳述しておく。

溪流にはスギ *Cryptomeria japonica* の大樹が多く、その間に点々とクヌギ *Quercus acutissima*, ミズナラ *Quercus crispula* 等の落葉広葉樹が混生している。兩岸の岩肌には、ジャゴケ *Conocephalum conicum* が生え、昼間でもうす暗くうっ蒼としている。小渓流はところどころ、止水状になり、周囲の落葉が水底に堆積している。

### 引用文献

- 川田英則. 1967. 香川県下のカスミサンショウウオ(第I報). 香川大学教育学部附属坂出中学校, 理科紀要: 1-8.
- . 1969. 香川県下のカスミサンショウウオ(第II報). 香川生物(4): 6-7.
- . 1974. 香川県の両生類. 香川大学教育学部附属坂出中学校研究報告1(4): 13-16.
- 岡田弥一郎. 1935. 日本産有尾類の総括と分布. 動物学雑誌 47: 575-588.
- 佐藤井岐雄. 1943. 日本産有尾類総説. 日本出版社(復刻版, 1977. 第一書房), 520pp.+31pl.+7p.
- 千石正一編. 1979. 原色両生・爬虫類. 家の光協会, 206 pp.
- 浦上仁一. 1939. 総合郷土研究. 香川県師範学校・香川県女子師範学校編: 36-44.

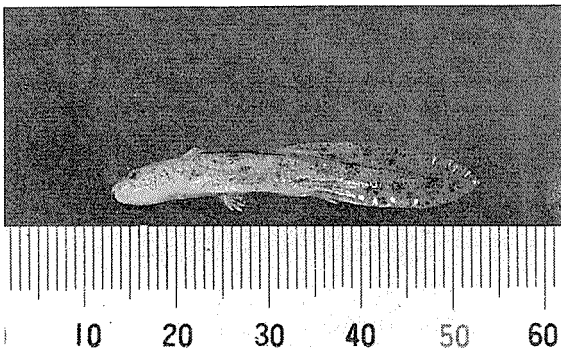


図1. オオダイガハラサンショウウオの幼生(アルコール液漬).

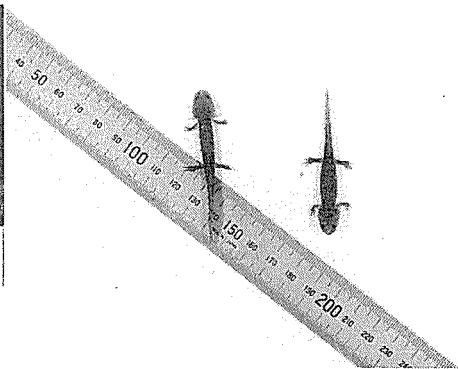


図2. オオダイガハラサンショウウオの幼生